後藤延子氏の書評に答える

丸山松幸

拙著『中國近代の革命思想』（研文出版）に對する後藤延子氏の書評（本誌第四十二卷第三號）ほど、故意の歪曲と批判のための批判に滿ちた文章を私は知らない。およそ書評という以上、まだその書を讀んでいない人を前提にして、著者の問題提起を正確に把握して紹介し、それに焦點を合わせて批判すべきは批判する、というのが最低の要件であろう。そうであってこそ、讀者は問題の所在を意識しながらその書を讀むことができるし、著者もその後の研究の資とすることができる。ところが後藤氏の書評はこの最低の要件を滿たしていないばかりか、私の論旨を意圖的に歪曲して攻擊したり、それもできないときは枝葉末節をあげつらって言いがかりに近い批判を加えるなど、何としても私の著書を貶しめねばやまぬという態度に終始しているのである。

實はこうした批判は後藤氏が初めてではない。私が一九六九年に『五四運動——その思想史』（紀伊國屋書店）を上梓して以來、この書に對してある種の人びとから首をかしげたくなるような批判が繰り返し行われてきた。そのことを私は再版に際して附した「新裝版によせて」（一九八〇年十二月）の中で、次のように書いた。

〈本書は刊行當時から多くの人びとの批評や批判を受けた。なかには、文化大革命と學園鬪爭が鋭い政治的爭點であったことを反映して、ほとんど批判のための批判としか思えないものもあった。例えば、私が「既存秩序の全面的な否定」と書いたのを、「既存組織の全否定」と曲解して（このように曲解する心理構造自體極めて興味あるものだが）批判を加えたり、私がカッコ附きで用いた語を、カッコを外した形で引用して攻擊を加えたりしたたぐいである。〉

そのほかにも、私が五四運動の歷史的意義について毛澤東「新民主主義論」を引用して「私がこれにつけ加えるものは何もない。私が本書で追求するのは、さきにも言ったように、五四運動を推進した知識人たちの意識である」と書いた個所を、「何もない」まで引用して「中國近・現代史研究において毛澤東の片言隻句までもが絶對的權威をもつもののように扱われてきたのは、最近まで日本も中國も同樣であった」と述べたものもあったし、また『新青年』マルクス主義特集號の出版時期に關して、私が、五四とマルクス主義傳播を關係づけるような中國側の誤った研究を踏襲したと論じたものもあった。

後藤氏の書評はこの種の批判の延長上にあり、ある限りの曲解を集大成したものである。これまで私はこれらに對してあえて反論しなかった。それらが部分的なものであったこともあるが、蔡元培流にいえば、

僕生平不喜作謾語輕薄語、以爲受者無傷、而施者實爲失德、××君詈僕、僕將哀矜之不暇、而又何憾焉。

と考えていたからである。しかし後藤氏の書評を讀むに及んで、私は自分の態度が誤りであることを知った。私がこれを默認することは、このように歪曲をあえてしてまでも黨同伐異を押し通そうとする風潮を學界にはびこらせ、未だ批判力の十分でない若い學生たち

に悪影響を及ぼすであろうし、眞の意味での研究の進展を妨げることにもなる。私個人についていえば、自分にとってあまり生産的とは思えないこんな文章を書くのは氣が重いが、やはり匡すべきは匡さねばならない。私には後藤氏の加えた批判に徹頭徹尾承服できないからである。以下、後藤氏の文の順を追って反論していくことにしたい。（文中の傍點は特に斷らないかぎり丸山が附した）

(1) 私の「李大釗の思想とその背景」について後藤氏は「五五・六年當時の日本の『主體性論』流行の思想狀況裡」で書かれたという。後藤氏は以前にもこの論文を「主體性論」的色彩が看取できるとし「彼（李大釗）の思想を『主体性論』的方向にのみ一面化し、その全面的把握への道を鎖してしまったのではなかろうか」と批判したことがある（「初期李大釗の思想」一九七四年）。これは私にとってまことに不可解な論である。いったい後藤氏は戰後思想史を多少とも辿ったことがあるのだろうか。いわゆる「主體性論爭」は戰後まもなくの四七―九年にかけて行われたものであって、當時自稱「前衞」黨の權威を背負っていた松村一人氏が「哲學上の修正主義」と決めつけたことで、いったん終止符が打たれてしまった。再び主體性論が活潑になるのは、五九―六〇年の安保鬪爭の昂揚と分裂の中で、變革を擔う者の主體性を問い直すという形においてである。もとより唯物論哲學における人間の主體性の問題がすでに解決されていたわけではないから、その間にも個別的な論はあったであろうが、五五―六年という、あたかも日共六全協とソ共二〇回大會の時期にあって、「思想の平和的共存」や「スターリン主義」が論壇の中心問題であったことは今なお鮮明に記憶しているが、「『主體性論』流行の思想狀況」というものを私は知らない。少くとも私の論文のモチーフとは關係がない。

私の論文は、李大釗の思想の核心を中國變革の主體の探求に求め、自らその主體として實踐を指向することによって思想をより豐かなものにしていったことを論證しようとしたものである。それは當時出版されたばかりの竹内好ら『中國革命の思想』（一九五三年）が李大釗について、

〈のちにマルクス主義に走ったが、それ以前の彼の思想には一種の生の哲學と見られるものがある。〉〈初期の彼の思想は、自我と社會、永遠と今との葛藤を主題としており、啓蒙期であった文化革命の時期を反映して、文化主義的な傾向をもっている。〉

としているのに對する批判として書かれたのであって（それゆえに竹内氏は私の論文を認めてくださったのだ）、後藤氏が「李大釗における『世界史』の發見」（一九七六年）の注で、私が李の哲學を「ベルグソン流の生の哲學」としているというのは、私の論文の讀み違いと研究史についての無知から來るものである。後藤氏は私の論文がすでに歷史的使命を果たし終えたというが、もしそれが「變革主體の確立」という私の論旨がすでに常識として定着したからというのなら、まことにその通りかも知れない。後藤氏が「數少ない資料で結論を急ぎすぎた」というこの論文から十七年後に書かれた後藤氏の「初期李大釗の思想」でもやはりその思想の特徵を「政治的自覺を中心に据える」「主體的自我確立論」としているのだから。

この私の論文と比較して後藤氏は里井彦七郎「李大釗の出發」（一九五七年）を「堅牢な實證性のゆえに……今なおその存在意義を誇っている」という。私も里井氏の論文を優れたものと認める。

里井氏も私もそれぞれの論文の末尾に附記しているように、この二つの論文はいわば二人の共同研究をそれぞれに發表したものである。當時里井氏が最も力を注いでいたのは、毛澤東の『矛盾論』を思想史研究の方法として李大釗の思想を分析することであった。そのことは論文の中にも鮮明に表われているし、後藤氏も前掲論文で「(里井)氏の『つねに矛盾の法則に照らして』『全面的』『發展的』に思想を把えようとする方法的自覺が、この場合にも大きな成果をもたらした。だが氏はどちらかというと、矛盾の同一性と相互依存性についての洞察が不十分であった」と書いていることから見ても、十分認識していたはずである。ところがここではもっぱら「堅牢な實證性」だけをとりあげて賞讃し、『矛盾論』的方法には口を噤んで語ろうとしない。これはおそらく後述する毛澤東をとりあげる態度の問題と關連あるものと思われるが、ここに後藤氏の書評の、言を以て人をはからず、人を以て言をはかるやり方が最もよく表われている。

(2) 「アジア・ナショナリズムの一原型」について後藤氏は、一應肯定的に評價したうえで、

〈從って著者の論の展開に基本的に異議をさしはさむ餘地はないが、ただ(李大釗の)これらの論文の發表時期は李大釗の思想發展過程の中で、「種界・國家を完全に打破」して「世界大同」を求める無政府主義的色彩が色濃く表面を彩っていた「過渡期」(書評子の「李大釗における過渡期の思想」參照)の產物であるという事實をどれほど念頭に置いているのかという點に疑問が殘らずにはいられない。〉

という。後藤氏は思想を發展としてしかとらえないから、李大釗についても、ブルジョア民主主義からマルクス主義への過程と考え、そこでこの時期を「過渡期」と規定するのである。こうしたとらえ方もありうることを私は否定しない。しかし私の關心は、そうした發展の奥底にあって發展を可能ならしめるものを追求することにある。後藤氏はこのようなとらえ方を全く認めない。あくまで自分の規定した「過渡期」の產物であるという「事實」を念頭に置けという。しかもそれを念頭に置けば「基本的に異議をさしはさむ餘地はない」論の展開にどうかかわるのかについて何の言及もないのである。もし後藤氏の論文が私のもの以前に發表されていたのなら、あるいは私も少しは念頭に置いたかも知れないが、いかんせん私の論文より遲れること十年である。後藤氏がもし自らを少しでも客觀視できるなら「後藤は過渡期の產物と規定するが、丸山はそうは見ていない。これはその後の李の思想をどうとらえるかの問題にかかわってくる」とでも書くのが普通だろう。眞理は我にあり、すべての者は我に從え、という唯我論的發想あるいは「前衞」黨的指導者意識がここにはしなくも露呈しているのである。

後藤氏はさらに、

〈また著者が李大釗の「個性の解放」の主張について、「それは中國變革の實踐主體創出を意味した。解放された個性とは、常に現在を超越し、未來の立場から現狀を變革する精神をもつものでなければならなかった」などとされるのは、李大釗の文意から離れた讀みこみすぎとしか考えられない。素直に讀むかぎりでは、被壓迫者がそれぞれの獨自性・主體性を回復することを指すものと思われる。〉

という。なるほどこれだけを取り出せばいかにも唐突に見えるだろ

う。だが私のこの文は、李大釗のある文章を「讀みこみすぎ」ることで作りあげたものではない。李大釗のアジア主義に關する諸論文を分析した結果として、壓迫－被壓迫の帝國主義世界の全體的否定を目指し、現在を超越しようとするものであり、その根底には「青春」以來の個性の解放を求める思想があり、「個性の解放そのものが原理とされる人間關係を、被壓迫者の連帶によってかちとること、これが李大釗の革命思想の根幹であった」という文脈の上で述べたものである。いったい後藤氏は李のどの文章を「素直に讀」んだのか。また被壓迫者が主體性を回復するとはどういうことだと考えているのか。主體性が回復されればそれで能事終れり、と李大釗は考えていたとでもいうのだろうか。壓迫されたものが壓迫者に抵抗し自らの主體性を回復するというのは、自らの未來を自らの手で切り拓こうとすることだろう。問題はその「未來」の內容である。明治日本もまた西洋列強の壓迫に抗して主體性を回復しようとした。そしてそれは帝國主義的世界を「現實」として肯定し、中國・朝鮮を侵略し條約改正を行って自らも抑壓者の地位にのぼることによって實現された。この日本の「大アジア主義」に對して、私は李大釗の「個性の解放—帝國主義的世界の否定」という「未來」の立場を對置したのである。全體を拔きにして部分だけを誤った印象を與える形で取り出すのは、書評として最も愼しむべきことではないだろうか。

(3) 「陳獨秀と李大釗」について後藤氏は「好論文である」と一應評価したうえで、

〈ただ李大釗との比較の上から陳獨秀をその實體よりも貶價する傾きが些か氣にならざるを得ない。例えばマルクス主義理解において陳の方がより正統的だとして「勞働者」という概念の例をあげているが、資料を明示していないので具體的な反論はできないが、少なくとも二〇年から二一年の社會主義論戰、無政府主義論戰時期の陳獨秀の「勞働者」の概念の理解は、著者の言うのとは全く正反對であることを指摘しておきたいと思う。〉

という。陳獨秀の再評價は近年中國で盛んに行われており、日本でも古厩忠夫氏が試みている（この古厩氏もなぜか私が「運動→思想」と書いたのを「組織→思想」と改めている）。かつて「李大釗における過渡期の思想」で、

〈李大釗の自覺は、陳獨秀の西歐の光明を認識しさえすればそれで事足れりとする安易な啓蒙主義とは異り……〉とか、〈たとい彼（李大釗）の自覺が觀念論的であろうとも、陳獨秀の單純明快な二者擇一と西歐の讚美といった安易さとは大きく異るであろう。〉

と書いていた後藤氏が「些か氣になる」ようになったのは、おそらく古厩氏の影響を受けてのことであろう。だが私はこれらの論文を讀んでみても、陳獨秀の思想に高い評價を與えることができない。たしかに陳獨秀の影響力は巨大であり、社會的役割も李大釗とは比べものにならぬほど重かったといえる。だが思想の質と影響の大きさとは別問題である。比喩的にいえば、李大釗の思想が、樹の年輪が年とともに大きくなるように、思想自體の必然性をもって豐かに深くなってゆくのに對して、陳獨秀の場合は鏡のように社會の傾向と要求をつぎつぎに先取りして映し出していくもののように見える（だからこそ比類のない啓蒙家・ジャーナリストたりえたのである）。そのいずれを重視するかは人によって異るであろうが、私は

李大釗のほうを、中國における革命思想の深化という面から重く見ているのである。

次に「勞働者」の概念について、一つずつ例をあげておく。どちらがマルクス主義から見て、より正統的であるかは讀者の判斷にまかせたい。

〈有一種自命爲紳士的人說〝智識階級的運動、不可學低級勞動者的行爲。〟這話很是奇怪。我請問低級高級從那裏分別？ 凡是勞作的人、都是神聖的、都比你們這些吃人血不作人事的紳士、賢人、政客們強得多。〉（李大釗「低級勞動者」一九二〇年）

〈從事實上說起來、第一我們要明白世界各國裏面最不平最痛苦的事、不是別的、就是少數游惰的消費的資產階級、利用國家、政治、法律等機關、把多數勤苦的生產的勞動階級壓在資本勢力底下、當做牛馬機器不如。要掃除這種不平這種痛苦、只有被壓迫的生產的勞動階級自己造成新的強力、自己站在國家地位、利用政治、法律等機關、把那種壓迫的資產階級完全征服、然後才可望將財產私有、工銀勞動等制度廢去、將過於不平等的經濟狀況除去。〉（陳獨秀「談政治」一九二〇年）

(4) 「民國初年の調和論」について、後藤氏は、

〈著者の調和論を中國の大同思想と關連づける把え方、及び李大釗について十八年七月に調和論は乘り越えられたが、「物心兩面の改造」の主張の中に調和という觀念として殘っているとの見解には殘念乍ら承服できない。まず前者について言うと、書評子は嘗て「康有爲の大同世界像」で板野長八氏の大同思想理解に重大な疑義を呈したが、從って著者が板野氏の論に依據して調和論を大同思想の調和思想的機能を受けついでいるとする點には、にわかに贊成しがたいということである。著者は本書二一頁で大同思想について板野氏とは別の見解を述べているが、だとすると一册の本に編むに當って少なくとも矛盾や喰い違いの生じないよう配慮して頂きたかったと思う。〉

という。板野氏の理解には疑義がある――丸山は板野氏に依據している――ゆえに丸山の論は承服できない、という三段論法である。では後藤氏の呈した「重大な疑義」とはどういうものか。後藤氏は板野氏の論を、大同說の根本基調を和の精神、無私の觀念と把えるものだとして「公とか和とか大同とかは多者の對立性を除去することによって實現する一者の樣相」という語を引用している。それに對して後藤氏自身の見解として、康有爲の大同說は、

〈國界・家界・身界の撤廢による私的境界の廢絕と、そこから必然的に歸結する、一切の差別・對立を超克した徹底的平等との兩義が、大同＝公なる概念の中に一體化しているところに、その最大の特色を見出すことができる。

從って以上の『禮運注』による大同概念の分析からすれば、板野氏の和の精神、「己れの對立性を制約し否定する」無私の觀念といった解釋には成立の餘地がなくなる。板野氏の論はその根底において搖るがされたわけである。〉

という。だが私にはなぜ「根底から搖るがされた」のか全く理解できない。いったい「無私の觀念」「多者の對立性の除去」と「私的境界の廢絕」、また「和の精神」「一者の樣相」と「差別・對立を超克した徹底的平等」は本質的にどう違うのか。ひょっとして後藤氏は「和の精神」を「仲よきことは美しきかな」、「無私の觀念」を「公平無私」「無私の獻身」といった通俗的な意味でしか理解していな

いのではないか。そうとでも考えなければ「板野氏の解釋には成立の餘地がなくなる」などと力みかえる理由がわからないのである。

次に私は「板野氏の論に依據して調和論を大同思想の調和思想的機能を受けついでいる」としているか。本書二一八―九頁で私は板野氏の、大同思想は傳統溫存の思想ないし傳統主義であるとする說を引照したあと、

〈果してそうだとすれば、大同あるいは調和ということを口にする限り、こういった舊思想に歸らざるをえないのか、また近代思想のなかで調和思想というのは傳統思想の尾テイ骨的存在にしかすぎないのか、ということが問題にされねばならない。〉

と述べて、民國初年という情況における調和論の展開とその意味を探っているのである。本書二一頁の大同思想についての記述（大同世界を招來するのは民の上に君臨するもの（天子）であって、民は上から安樂を配慮される羊の群にすぎぬ）と、ここでの傳統溫存的性格とは全く關係がない。また板野氏が大同說を絕對者原理ないし專制主義の一形態だとする見解（これは後藤氏のいう、敎主の絕對的權威のもとにおける一君萬民構造と、內容的には同じことだ）と私の記述が基本的に「別の見解」だとも思っていない。

次に、私は「『物心兩面の改造』の主張の中に調和という觀念として殘っている」と主張しているか。私は、

〈（李大釗は「私のマルクス主義觀」のなかで）單に物質的基礎の變革のみではなく、倫理的感化・人道的運動によって、過去に養われてきた敵對・抗爭という惡性質を取り除かねばならぬ、と主張している。〉

と書いて、そこに調和の觀念の殘存を認めたのである。「物心兩面の改造」という言葉を使うなら「心の改造」の面で、對立する相手を壓迫し抹殺せずんばやまぬような精神を改めて、人道主義に基づいた暴力によらぬ進步を追求せよと說く主張の中に殘っているというのである。後藤氏は「思うに李大釗の調和論は……」と長々と述べているが、そこに書かれていることは言い回しこそ變えてあるがすべてかつて私が李大釗に關する諸論文に書いたことばかりである。興味のある讀者はどうか引き比べていただきたい。

(5) 「『社會主義論戰』における中國初期社會主義者たちの思想」について、後藤氏は極めて惡質な歪曲を行っている。

〈……極めて不完全ながらも中國變革の初步的プログラムを提出した陳獨秀らの努力は、眞の中國變革の理論＝毛澤東思想の卓越性を際立たせるための否定的評價しか與えられない。そしてそうした視點に立つかぎり、張東蓀の問いかけの方が、「現狀のリアルな分析と革新運動を成立せしめる條件の檢討を迫るものであった」と評價され、例えば當時の農民の實情について、地主の取り分が五割ないし四割で、農民はさほど苦痛を受けていないなどとの張東蓀の發言は見過されてしまう。〉

これだけを讀めば、私が毛澤東をもちあげるために陳を貶價しており、したがって陳を攻擊する反動派にさえ肩入れしているということになる。そうした印象を與えるように文章が作られている。だが私は張東蓀のほうを陳獨秀らよりも高く評價してはいない。私は張の共產主義運動に對する攻擊は明らかに意圖的であり、その論理は後進國の反動派に共通のパターンであることを述べたうえで、しかもなお彼がひとたび社會主義をくぐりぬけており、社會主義を究極の理想と認めているだけに、「貧困と無知の支配する中國におい

て社會主義は可能であるか、という彼の問いかけは、現狀のリアルな分析と……」と書いたのである。そして張東蓀の主張を紹介したあと、

〈ここで提起されている問題は、中國の現狀をいかに把握するか、中國を救う道は何か、それを支える條件は存在するか、その道を推進する主體は何か、國內の變革と外國勢力への抵抗はどのような關係にあるか、という中國革命全體にわたるものであり、マルクス主義者がこれに答ええたときはじめて、革命の中核としての理論形成能力が證明される、という性質のものであった。〉

としめくくっているのである。問題は「問いかけ」の重さである。それとも後藤氏は、相手が反動派なら、どんな問題提起であれ、それを受けとめることさえ相手を評價することになるというのだろうか。しかも、この曲解は後藤氏が「未熟のゆえに理解不十分」で生じたのでは絕對にない。明らかに故意の歪曲である。なぜなら、後藤氏は「中國におけるマルクス主義の受容」（一九八三年）でこう書いているからである。

〈問題は、中國に社會主義實現の條件・資格はあるか、あるとすればそれはいかなるものであり、そしてそれを現實性に轉化させるための具體的な道筋は何か、そしてそのため當面いかなる行動が要請されるか、ということである。そして陳獨秀の論點はなお一般論に止まり、社會主義必要論の域を脫却しきれていなかった。そして折しも始まった『改造』（張東蓀らの雜誌――丸山注）三卷六號の攻擊は、これらの回答とあわせてマルクス主義に對する理解の深化を緊急に要請するものであった。〉

私の文章との酷似は別として、まさか後藤氏はこれを、『改造』の攻擊のほうを「マルクス主義に對する理解の深化を要請するもの」と評價して、陳獨秀を「社會主義必要論の域を脫却しきれていなかった」と決めつける意味で書いたのではあるまい。

後藤氏は私の論文を、

〈毛澤東理論の出現の必然性とその正當性とを辯證するために社會主義論戰を眺めるという、結論が既に前提されているような研究が果して研究と呼べるのかと疑わざるをえない。〉

と評する。おそらく私が論文の末尾に附記のように記した次の文章をとらえてのことであろう。

〈マルクス主義者は抵抗に起ちあがった民衆の前に、それらの敵（個々の地主、資本家、列強の外國人、その買辦等々）の結びつきを明らかにしなければならない。敵の結びつきが明らかになるに應じて味方も結びつくことができる。科學的な階級分析によって敵・友・我の關係を明らかにし、廣範な戰列を組んで眞の敵とたたかうための具體的目標を提起してこそ革命を導く綱領となる。私はそのようなものの實現態として毛澤東の思想を考えている。〉

私がこの論文の中で毛澤東の名をあげたのはここ一個所である。後藤氏は「毛澤東の思想」と「毛澤東思想」「毛澤東理論」の區別さえもつかぬようであるが、私は思想というものをすぐれて人間的な營みだと考えている。人は歷史的條件に制約されながらも、それを超えて未來を展望し、人々を動かして歷史をつくる力を生み出すことができる。それが思想だ。したがって私はある思想の「必然性」だとか「正當性」だとかを辯證するつもりはない。しかし毛澤東の思想の「卓越性」は認めないわけにいかない。一九二五年以後

の毛澤東は、當時の誰よりも深く中國變革の道をつかんでいたように私には思える。陳獨秀らの努力を否定的に評價しようとすまいとそれは關係のないことである。

後藤氏は私の論文を「果して研究と呼べるのか疑わざるをえない」という。これは研究者に對する最大の侮辱である。しかもすぐそれに續けて「勿論、『覺え書』の方を見ると、著者が必ずしも最初からそうした問題意識をもって着手したのではないことがわかるが……」と書く。これはいったいどうしたことか。そうでないことがわかったなら、なぜ書き改めないのか。それとも後藤氏らは「毛澤東主義者」(と自らが思い込んだ者)に對しては、どれほどの歪曲と侮辱を加えても許されることになっているのか。後藤氏がもしまだお讀みでないなら、竹内好氏の「女なら」(『全集』第十一卷所收)をぜひ一讀されることをお勸めしたい。自分がどれほど愚劣なことをしているかを客觀視する一助となるだろうと思う。

(6) 後藤氏は私の『五四運動』に對して、(イ)「形骸化された民主主義に對する闘い」と把える五四運動觀、(ロ)アナーキー狀態に變革のエネルギーを求め、李大釗をアナーキスト的に評價すること、に異議を唱えた「初期李大釗の思想」を誇らしげにもちだしているが、その內容について書評では何も述べていない。そこで、この論文から後藤氏の「異議」を見ていくことにする。まず(イ)について、後藤氏はこの論文の注(4)でこう書いている。

〈「形骸化された民主主義」とは、とにかく一度は民主主義が樹立されたことを前提として使用されるのが通常である。辛亥革命が民主主義を樹立できなかったところにこそ、問題がある。五四運動は、うちたてられなかった民主主義のためにひき起されたと見るのが最も正確だろう。〉(傍點は原文のまま)

「異議」というのはこれだけなのである。啞然とするとはこのことであろう。これで後藤氏はなにごとかを言ったつもりなのか。要するに言葉だけの問題なのだ。誰も辛亥革命で民主主義が樹立されたなどと言ってはいない。私の著書を讀んだ人なら誤解のしようもないと思うが、私は辛亥革命がもたらした眩いばかりの民主主義の光明が、暗黑を暗黑としてとらえ、それに抵抗する五四の批判精神の根源となったと考えるのだ。長くなるから引用しないが、そのことは『五四運動』第一章の冒頭に明確に記しておいた。民主主義とは何か、樹立されたとはどういうことか、といった定義の問題にはここでは立ち入らない。「形骸化された民主主義」は、お望みなら「有名無實化した」と言い換えてもよいが、それでは當時の青年たちの挫折感の深さは表せない。

次に(ロ)について後藤氏は、

〈五四の學生達の意識に、文化大革命の紅衛兵やスチューデント・パワーの學生達の意識を投影させて把え、アナーキー狀態の中に變革のエネルギーを求めるようになると、氏の方法は致命的缺陷を露呈してこざるをえない。そして遂に、「抑壓の機構すべてを破壞して、民衆に自發的にみずからの秩序を形成させること、そのような民衆を創造し、みずからもその一人となることこそ革命運動である」との、「革命家としての最も純粹な信念」を李大釗がつかんだと評價する。かくして李大釗は、丸山氏によってアナーキストとして禮讃された。〉

という。おそらくこれは私と後藤氏との運動觀の相違であろう。五四の青年たちは誰に指導されたのでもない。ひとりひとりが自らの

怒りを爆發させ、自らの考えと意志でそれぞれの行動をとった。パンフレットを作る者もあれば、街頭で演説し、雜誌を作り、商店へ働きかける者、國產品を賣り歩く者もあった。なかには暴力行爲に出る者もあったし、テロを企てる者さえあった。これらが一つになって五四運動は巨大な歷史的意義をもちえたのだと私は思う。「アナーキー狀態」といえば「無秩序、デタラメ」としか理解できず、明確なプログラムや戰略をもち自分の引いた路線に大衆を從わせ引きずり回して「整然」と政治目的を達成するのが運動だと考えている者には、「民衆に自發的に秩序を形成させること」は「民衆の自然發生性に拜跪」することであり、「みずからもその民衆の一人になること」は「展望ぬきの盲目的實踐」と見えるのであろう。ついでに言えば、私は李大釗を「アナーキストとして禮讚」したことは一度もない。

最も驚くべきは、これに續く次の文章である。

〈ところで李大釗は丸山氏の言うように觀念的な主體的自我の確立を說き、民衆の自然發生性に拜跪して、展望ぬきの盲目的實踐を讚美したであろうか。確かに、氏の賞讚する李大釗の「自覺」は、「懺悔」と同義語で、自己の內なる舊さの凝視という嚴しい自己否定を含んでいる。だがそれは單なる道德主義的反省に終始するものではない。自己の內面に「舊惡」を巢くわせた社會的狀況への鬪いに決起する、變革主體確立への精神的發條として機能する面を見すごしてはならない。〉

最初にこれを讀んだとき、私は狐につままれたような思いであった。後藤氏は自分と丸山とを取り違えているのではないか。「この李大釗の自覺は……暗黑狀況の下で呻吟する人民を逆に加害者として告發する惡しき總懺悔に陷る道德主義的偏向をもっている。……彼の自覺は、精神內面における回心、觀念論的自己否定の色彩が強い」と書いたのは後藤延子氏ではなかったのか（「李大釗における過渡期の思想」）。逆に「（李大釗は）眞の自覺はこのような厭世絕望ではなく、自己の存在をかけた舊鬪努力を生むものでなければならぬと呼びかけるのである。……李大釗のそれ（自覺）は、自己の內部から『中國の暗黑』との鬪いを要求するものであった」と書いたのは丸山松幸ではなかったのか（『五四運動』九九頁）。他人の後追い研究ばかり續けているうちに、ついに後藤氏は自說と他說の區別もつかぬようになってしまったらしい。

(7) 後藤氏は私のアナキズムに關する諸論文について、

〈今ここでそのいちいちを紹介する紙幅もなければ、その必要も認められない。というのは、それはあまりに問題意識過剩な研究であると同時に、例えば淸末のアナキズムについてであれば、既に有田和夫氏がなされている方向を受繼いで、吳稚暉、李石曾や蔡元培などまで視野に入れてその全體像をつかむという周到な用意を缺いているからである。〉

という。私は五四運動を調べているうちにアナキズムの重要性に氣づき、まず「吳稚暉、李石曾や蔡元培などまで視野に入れてその全體像をつかむ」ためにスカラピーノ&ユー『中國アナキズム運動』を翻譯し、それに『新世紀』『天義』『民聲』『新靑年』から特徵的な論文を拔きだして附錄した。これらの雜誌の覆刻版で缺號になっているものはパリ圖書館から取寄せた。有田氏の論文ももちろん讀んだ（本書一一九頁）。しかしその方向は「受繼」がなかった。なぜならそれが劉師培を前近代的、吳稚暉を傳統的權威と斷絕し近代的

思考をもって純粋にアナキズムを展開させたもの、として両者を對比していたからである。傳統と離れて直譯的に「近代」を主張する「思想」に私は興味がもてない。當の有田氏自身が最近著『清末意識構造の研究』の中でこの論文を「方法論的には現在では否定するほかはないものである」と書いている（三〇七頁）のを後藤氏はどう見るのだろう。

もちろん私の研究が完璧なものだとは思っていない。全體像もまだつかんでいない。「自分で手を汚さずに他人の論文をあげつらうのは極めてたやすいことである」という後藤氏であるからには、清末アナキズムについてあるいは私以上に「周到な用意」を具え「全體像をつかんだ」成果がすでにあるのかも知れないが、寡聞にして私は知らない。ぜひ知りたいものである。

(8) 後藤氏は「我々は今、一切を相對視し、その歴史的時點にもう一度立返って、客觀的、批判的に中國近代思想史を眺め、その全體像を過不足なく把えることのできる地點に立っているのである」という。私は情報量が多くなったからといって「客觀的・批判的」研究ができるとは思わないし、後藤氏のいう「客觀的・批判的」がどういう意味かも知らない。ただ私は、われわれが中國に取り組もうとするとき、生物學者がカエルを解剖するようなわけにはいかぬと考えている。本書七頁に私は「中國革命はわれわれにとって外在的超越的に規定しうる對象ではない。現代中國はなによりも日本帝國主義とたたかうなかで形成されたものなのである」と書いた。中國近代の歴史は日本を含む帝國主義列強の侵略に對する惡戰苦鬪の歴史であり、現代中國はプラスであれマイナスであれ、その刻印を消しようもなくとどめている。中國の近代ひいてはアジアの近代を考えることはそのまま日本を考えることだという考えは一九六〇年に「アジア・ナショナリズムの一典型」を書いて以來、今日まで變っていない。確かに一九四五年の敗戰で日本帝國主義は一たん崩壞した。だが朝鮮戰爭の特需景氣から始まって、日本はアジアを踏みつけにして自らを肥えふとらせる戰前の構造を（武力侵略こそないが）ふたたび蘇らせた。中嶋嶺雄氏は張香山氏を批判する文章で「日本のような自由と民主の國では」と書いているが、私には平氣でそのようにいう神經がわからない。「自由と民主の國」が、なぜ自由と民主を抑壓するアジアの反動政權にテコ入れするのか（斷っておくが私は張香山氏の論旨を肯定しているわけではない）。政治・經濟構造だけではない。人々の意識においてもまた過去の歴史を忘れて急速に中國を含めたアジア蔑視、「東亞の盟主」意識が復活しつつある。しかもその歴史忘却の方向は「教科書檢定」という形で權力の主導で進められているのである。「侵略」記述禁止はアジア諸國の抗議によってしぶしぶ引込めたが、全高校生必修である「現代社會」教科書では、現代に至るまでの歴史が一切削除され、記述することさえ認めていない。このような今日の情況について、私は『五四運動』の「あとがき」で「中國人は五四を人民革命によって實らせたが、われわれは『五四』の誤ちにまだ結着をつけていない」と書き、國交回復後の「新裝版によせて」でも「だが本當に日本も中國も變わったのだろうか。この十一年の目まぐるしい變化は、果たして兩國の國民の一人ひとりの心の奥底に觸れる、いわば歴史そのものの變革から生まれたものだろうか。友好ムードは、五四以來の歴史にわれわれ自身が結着をつけた上でのものだろうか。もしそうなら本書を再刊する理由は何もない。しかし私には到底そのよう

には思えないのである」と書き、その延長上に本書の「あとがき」を書いたのである。後藤氏はこの「あとがき」について、

〈非常に残念なこと）は著者の、「中國の近代ひいてはアジアの近代を考えることは、日本の近代を考えることであり、自分自身の生き方まで含めて日本の進路を摸索することでもあった」という嘗ての「熱い思い」があったがゆえに、今迄の研究の跡を正當化し居直って、「かつてわれわれが受けとめた課題が虚妄であったとは思えないし、今日の情況がその課題を乗り越えたところに生まれたとは、まして考えることができない」として、現代中國に背を向けて、それを不可解なものとして探究中止に陥っている點である。これは非禮を顧みずに言わせて頂くならば、倨傲であり、怠慢であり、現役研究者である著者の研究者としての敗北宣言と言ってもよかろう。〉

という。いったいこの文章のどこをどう讀めば「現代中國に背を向け」「探究中止に陥っている」と讀めるのか。後藤氏は何かひどい思い込みをしていて、まともに他人の文章が讀みとれないのではないか。ともかく私の文章を批判している以上、後藤氏は、今日の情況は日本も中國もすっかり變化しており、過去の課題など乗り越えられていると判斷しているのであろう。私には到底そうは思えないが、私の判斷も相對的なものであるから、後藤氏のような判斷もありうることは認めよう。私は自分と異る判斷をもつ者を「倨傲である」と決めつけるほど倨傲ではないつもりだ。「一切を相對視する」という後藤氏に望みたいことは、どうか自分自身をも相對視してほしいということである。

最後に。後藤氏がこの拙文に再批判を加えるのはもちろん自由だが、私はこれ以上この論議にかかずりあうつもりはない。私に残された時間はもうそれほど多くはないし、「現役研究者」としてなすべきことはあまりにも多いのである。